Osaka University Knowledge Archive

Title	三角縁神獣鏡の研究
Author(s)	福永, 伸哉
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41319
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【29】

氏　　名	福　永　伸　哉（ふく ながし んや）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１９６７８　号
学位授与年月日	平成 17 年３月 30 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**三角縁神獣鏡の研究**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　都出比呂志 （副査） 教　授　村田　路人　　助教授　高橋　照彦

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、わが国の国家形成期にあたる古墳時代に各地の有力古墳に副葬された三角縁神獣鏡の総合的な分析を基礎にして、その鏡を社会秩序の形成と維持に大きな役割を果たした威信財と位置付けることによって、古墳時代の地域間の政治的権力関係や展開過程などを明らかにし、さらには比較考古学的手法をも取り入れながら古墳時代の歴史的位置を考察したものである。本文は A4 判 360 頁（400 字詰原稿用紙約 1020 枚、図ならびに写真 131 点、表 28 点）で構成されている。

本論文では主に以下の４つの論点を立てている。論点の第１は、三角縁神獣鏡の系譜と製作地の問題である。三角縁神獣鏡のうち文様が精緻なものは、これまで中国製とみなされてきた。ところが、それらも日本製であるとの説が中国の研究者などにより提出されて、製作地論争の帰趨によっては、日本における古代国家形成過程の研究の蓄積がゆらぎかねない状況にあった。そのような中で、本論文は、鏡背中央部にある鈕の孔の形態に初めて着目し、さらに外周突線といった図像文様や銘文の特徴などをも総合的にとらえることにより、従来とは全く異なる視点で三角縁神獣鏡の系譜と製作地へのアプローチを試みた。その結果、三角縁神獣鏡は魏晋代中国華北地域の工人が魏晋の領域で製作した鏡であることを明らかにし、魏晋王朝が邪馬台国、初期大和政権との正式交渉の中でのみ与えた「特鋳鏡」であるという理解を示した。

論点の第２は、三角縁神獣鏡の製作年代と編年の問題である。中国製の三角縁神獣鏡の製作年代は、他種の中国鏡から推測される年代を参考に、西暦 239 年～280 年代、また日本での倣製開始は西晋の滅亡による入手途絶が契機になったという新たな解釈を示しながら、倣製三角縁神獣鏡は４世紀第１四半期より 70～80 年間の製作と結論付けた。

論点の第３は、邪馬台国政権から初期大和政権にかけての政治展開である。まず、三角縁神獣鏡の舶載以前、邪馬台国による中国製画文帯神獣鏡を用いた政治戦略があったこと、その延長上に魏王朝の威信を持つ三角縁神獣鏡の登場があったことを解明している。また、三角縁神獣鏡に代わって出現した新たな神獣鏡や、筒形銅器、巴形銅器などが新興勢力による配布であることを想定し、中国華北王朝の滅亡に伴い、朝鮮半島との通交を基盤にした河内勢力の台頭という政治変動を導き出した。さらに、古墳時代の首長墓の系譜変動と墳墓要素変化の連動にも着目し、古墳時代において鏡など威信財のコントロールが、中央政権内で主導権を握った勢力の意図的で有効な政治戦略であったことを主張した。

論点の第４は、古墳時代の社会を国家形成過程に位置付けるという理論的な問題である。まず古墳時代は、有力者の葬送儀礼の場である墳墓に社会の膨大なエネルギーが投入された特異な時代であると理解した。そして、律令制へ

の達成度を判定するよりも、律令制段階とは社会の統合や組織化の異なるタイプとしてとらえるべきであると主張し、周辺の文明社会の影響を受けながら国家形成へのさまざまな道筋を模索した二次国家（secondary state）として性格規定をした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、いままで誰も目を向けなかった三角縁神獣鏡の長方形鈕孔や外周突線という細部の特徴に初めて着目し、それらの要素を分析的に観察することで、今まで闇に閉ざされていた鏡種の違いを越えた工人系譜を探る方法を明らかにし、三角縁神獣鏡が魏晋の工人によって華北東部地方で製作されたことを解明するという画期的な仕事を成しとげた。これは学界でも既に高い評価を受けており、日本考古学のみならず中国考古学にとっても非常に大きな成果である。

この成果を基礎に、三角縁神獣鏡に９段階（舶載４段階・倣製５段階）の変遷とおよそ150年間の製作期間幅を割り出したこと、鈕孔方向の違いに初めて着目して、同型鏡技法から同笵鏡技法へという鏡笵製作法の変化を指摘し、舶載鏡と倣製鏡の大きな技法差を抽出したことなど、考古資料として新たな基礎的枠組みを与えた点でも貴重な研究である。

また、考古学からは探求の難しい政治動向を解明するため、考古資料を徹底的に分析することで最も穏当な解釈に導いている。そして、国家形成過程にまで論を進め、広く海外の研究者（F. エンゲルス、C. レンフルー、K. フラナリー、T. アールなど）の研究成果をふまえつつ、日本の国家形成に新たな視点を提示している点でも意欲的であり、今後のこの分野の研究においては常に参照される論文になるものと評価できる。

ただ、本論文で目を向けてほしい点も残されている。例えば、古墳時代には道路の整備や耕地開発が古墳造営とおなじようなスケールで行われた痕跡はみあたらないと記述しているが、巨大な古墳を継続的に築くためには、それを執り行う多くの人々の食料を余分に生産しなければならない。人の生活には経済が必ず伴い、その経済活動が政治動向にも影響を与える。国家形成過程の理論化に向けて、経済的な側面を今後の研究視点にもっと組み入れてほしいと願う。

とはいえ、その丹念な資料分析と綿密で着実な基礎研究を提示する点では、他に類をみない高度な水準に達しており、その一方で細部の検討のみに陥りがちな研究状況の中で、古代国家形成過程にまで迫ろうとする姿勢も高く評価できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと認定する。